

# 日本疫学会 ニュースレター

平成19年3月15日発行 No.29

## 理事長退任にあたって

日本疫学会 前理事長  
吉村 健清



### 1. 就任早々のハプニング

2004年1月、山形で開催された第14回学術総会（深尾彰学会長）の会務総会において、理事長就任が正式に承認され、3年間の疫学会の運営を任されることになりました。早速事務局を立ち上げるべく、井手玲子助手を事務局長とし、庶務（和田）、経理（田村）の体制で、能勢前理事長の事務局（黒沢洋一事務局長とそのスタッフ）と事務引き継ぎを行いました。

前事務局の指導のもと、何とか引き継ぎを終え、いよいよ活動を開始しようとした矢先に、私自身に福岡県保健環境研究所長にという強い要請があり、3月に大学を退職、4月から就任することになりました。一時は理事長辞任も考えましたが、周囲の励ましの言葉もあり、任を全うすることに致しました。

最大の課題は新事務局体制でした。幸い、片岡恭一郎情報管理課長が事務局長を引き受けてくれ、更に庶務を尾辻君、経理を山城君が担当してくれる体制を作ってくれました。理事長就任早々、私の個人的な異動で2度の事務局移転を余儀なくされ、またその困難を乗り越ってくれた井手、片岡両事務局長とそのスタッフにお詫びすると共

に、心から感謝いたします。

なお、今回の2度の事務局移転という異常事態を除いても、3年毎の事務局移転は新事務局にとってかなりの負担になることは事実です。特に中間年の会員名簿作成までは、慣れないこともあり負荷が大きいように思います。今後の疫学会運営の検討事項としていただければ幸いです。

### 2. 学会運営について

日本疫学会は1991年の設立当初、会員数も300名程度と少なく、経済的にも苦しい時期が続いておりました。しかし、歴代理事長、理事を中心とする

執行部、事務局長そして会員の努力により、今や1,420名（2006年12月31日現在）の会員を有するまでに成長し、学会の財政の余裕が持てるようになりました。

そこで、これまでは学会活動の多くを会員のボランティア精神に頼っていたものから、徐々に学会活動として必要な経費は学会で負担するという姿勢に変える努力を理事会に諮りながら試してみました。

### CONTENTS

理事長退任あいさつ.....吉村 健清 1	学会報告
理事長就任あいさつ.....児玉 和紀 2	第17回日本疫学会学術総会を終えて
私の書架から.....辻 達彦 3	西 信雄 9
新入会員	第12回若手の集いについて
私と疫学.....崔 信義 5	宮木 幸一 10
私と疫学 ~疫学を地域の方の健康に	学会案内
結び付けたい~.....山本 美江子 6	国際疫学会西太平洋地域学術大会2007 11
研究班紹介	第18回日本疫学会学術総会の予定... 11
AGESプロジェクトと「健康の	第39回アジア太平洋地区公衆衛生学術
不平等」研究会.....近藤 克則 7	連合（APACPH）国際会議のご案内 11
日本疫学会奨励賞を受賞して	地域がん登録全国協議会
血圧変動から疫学・臨床・薬学の	第16回総会研究会のご案内 11
接点を求めて.....大久保 孝義 8	日本疫学会新役員決まる..... 12
肥満の病態解明を目指す疫学研究	事務局だより..... 12
八谷 寛 9	

まず学術総会の開催です。学会長になると一番の心配は開催資金で、寄付集めに頭を悩ますこととなります。みんなをお願いした学会長には、お金のことより学術総会の企画に力を注いでもらいたいと、未だ未だ十分ではありませんが学術総会開催補助金を増額しました。

次は国際交流委員会での日韓疫学セミナー等の開催です。これまではセミナー発表者に旅費負担をお願いしてきました。これでは疫学会として企画することは困難です。そこで旅費の補助ができる程度に増額することを認めていただきました。また2005年にはバンコクで国際疫学会が開催されました。優秀な若手疫学研究者を国際学会に派遣したいと、疫学会で初めて旅費補助をすることを決め、公募の中から10名を選考し派遣しました。今回はブラジルですので経費が大変ですが、補助制度が続けられることを願っております。

更には学会誌である Journal of Epidemiology への投稿料や雑誌印刷に要する経費の免除、一時HP上で発行していたニュースレターの印刷発行の再開、疫学会専用備品としてのコンピューター購入（引き継ぎ円滑化のため）、委員会等の出席旅費の手当等ができるようになりました。

### 3. 疫学の発展を目指して

理事長就任当初に疫学会のすそ野を広げたいと述べました。臨床家を、感染症専門家を、衛生行政関係者を、保健予防従事者を疫学会の会員とし、疫学を軸にして幅広い議論ができる学会にしたいと思ったからです。新入会員をみると以前に比べ広い分野の方々がおられるようですが、多様性があるという程の分野別会員構成ではないようです。今回の広島の学会で上島理事から共同研究の重要性が強調されましたが、全く同感で、異分野の研究者・保

健従事者と共に仕事をして、お互い刺激し刺激され、発展していくものと考えます。疫学のコンセプトを理解してもらうためには、今後もすそ野を広げる努力をお願いしたいと思います。

次に疫学教育システムの強化を就任時にあげておりました。色んな分野で疫学会会員が疫学教育に力を尽くしている様子が、広島で報告されておりました。また学会の疫学セミナーも盛んになっており、これも会員の努力の賜と感謝しております。

最後になりましたが、3年間理事長として任を全うできたのは、理事の皆さんをはじめ、会員の皆様の温かい御支援のおかげです。改めて深く感謝いたします。また任期中、学術総会を開催いただいた上島弘嗣、徳留信寛、児玉和紀 各学会長の御尽力に感謝いたします。日本疫学会のますますの発展を祈念して退任の挨拶に致します。

## ごあいさつ

日本疫学会理事長  
児玉 和紀



平成19年度より日本疫学会理事長を務めさせていただくことになりました。大変な名誉と受け止めていますが、同時に責任の重さに身の引き締まる思いがいたしております。

ご存知のように、日本疫学会が1991年に発足してちょうど15年が経過しました。この間、歴代の理事長（廣畑富雄、柳川洋、田中平三、能勢隆之、吉村健清の各先生）のご指導のもとで日本疫学会は発展して参りました。発足当初約300名であった会員数も、今では1,400名を超えております。また機関紙 Journal of Epidemiology は編集委員長以下、関係各位の並々ならぬ努力により年6回の発行が定着し、さらに

インパクトファクターも1.247を得るにいたっております。ニュースレターも紆余曲折はありましたが、年2回電子版と印刷版の両方が発行されております。学会の財政状況も一時悪化いたしました。これも関係各位のご努力により、いまは改善しております。

このように、学会活動は軌道に乗ってきておりますが、これから本学会をさらに発展させねばなりません。

疫学は臨床医学、公衆衛生学および関連領域における研究と実践のエビデンスと方法論などを提供する科学であります。しかしながら疫学という学問が、公衆衛生における対策決定や臨床医学・基礎医学の発展にどれだけ貢

献してきたかとなると、いささか心もとなさも感じています。特に、臨床医学領域で疫学の重要性が十分に理解されているか疑問に思っております。さらに、個人情報をめぐる社会情勢の変化の中、十分な配慮を行ったとしても、疫学調査がやりづらい環境になりつつあり、憂慮しております。また、疫学者ならびに生物統計学者の育成も不十分と言わざるをえません。

そこで、このような背景をもとに、第17回日本疫学会学術総会の折に開催

された理事会において、日本疫学会に「日本疫学会将来構想検討委員会（仮称）」の設立を提案させていただき、承認をいただきました。委員長を東北大学大学院の辻一郎先生にお願いし、

先に述べました懸案事項などについて可及的速やかに議論していただき、疫学ならびに日本疫学会の進むべき方向性を見出していただくことしております。

これからの3年間は、会員の皆様と問題点について共通認識を持ちながら、日本疫学会の運営に当たっていく所存でありますので、どうかご理解とご支援をよろしくお願い申し上げます。

**児玉和紀先生のプロフィール**

1947年11月13日生まれの猪の年男

家族構成：妻と一男一女

経歴：循環器内科医から疫学に転向、一時救急医療・集中治療にも従事

座右の銘：温故創新（ただし、恩師重松逸造先生からの借り物）

趣味：写真撮影

一番つらかった時期：米国での内科レジデント時代

一番楽しかった時期：まだ無い。多分これからのいつか。

一番うれしいこと：師匠、先輩、研究仲間、部下に恵まれていること。

日本循環器病予防セミナー - や英国疫学公衆衛生コースなどで、多くの若手研究者にめぐり合えたこと。

**私の書架から**

群馬大学名誉教授  
辻 達彦



人は誰でも、忘れがたい書物があると思う。特に、感受性に富む若いときに読んだものはしかりである。各自の生まれ育った環境によって自ずと色々な違いが在るにしても、幼少時に親しむのは先ず家庭にあった蔵書であろう。

父は陸軍軍医あがりの町医者（明治末 - 昭和十五年）であった。座敷にある書架で記憶にあるのは森鷗外や尾崎紅葉の全集、大日本史（漢文）などである。その他、日露戦争関係の記録やアトラスが目立ち、関東大震災の部厚な記録など、小生の密かに愛読したものである。

勿論、洋和の医書は在っても、小学生には歯が立たず、僅かに読み通したのは「北里柴三郎伝」（私家版）であった。これは父がかつて北里研究所に一時在籍したらしい因縁から所持していたものであろう。

私が後年医学の道に入ったのは、代々医系に生まれ、子供のときから家を継ぐということに疑問を抱かなかつ

たことにも因るが、「北里柴三郎伝」はひとつの刺激であったろう。

この度、ウィリアム・ピクルズの古い著書を翻訳して、「村医の疫学」と題して刊行したが、その実現に大きい原動力となったのは、英国では今なお医師になるうとするものの必読の一書として挙げられているからであった。すなわち、ニア・クラシックスとして位置づけられている存在に感動したことには他ならない。

翻って、本邦においてこれらに匹敵する医学の準古典を問われたならば、様々な答えが予想される。問われた人の経歴により、出身校別などに左右されよう。医のフィロソフィは全く同一である保証がないからである。

余談になるが、俳句の結社では主宰誰某、師系例えば水原秋桜子などと紹介されるのでおおよその傾向がつかめる。

辞書によると、古典（クラシックス）とは文学を初めとする学問、芸術上の

作品で、後世の模範となるべき歴史的評価の定まったものである。ピクルズの著書が1939年にできたときすでに将来の古典との呼び声が高かったというのでまさに稀有の書である。

一般に医学に関するものは文芸作品と異なり、学問の進展が早すぎ、数十年に亘り声価を保つことは困難である。したがって、医学のなかで歴史的なものは古典あるいは准古典としてリストアップされやすいのは当然であろう。

さきに触れた根拠は英国の文献... 「その日その日の生活史」ロード・テラー・オブ・ハーロー著（1988）により、そのサブタイトルは「これから社会の医師になろうとする人の為の伝記的ガイド」となっている。因みに、著者は医師、政治家、および行政官として種々の制度と施設の創成期に輝か

しい役割を演じている。

前述のロード・テラーの原著を読み始めて、社会の医師（ドクター・オブ・ソサイエティ）という一節から、その意図がほぼ飲み込めたと思う。彼の詳しい経歴が示すように、単なる人体の医師というよりは、行政、政治などの領域を含めた、人々のおかれた社会環境の医師という発想であるらしいことが、判る。わが国でいえば「上医は国を医す」ということばに思い当たった。彼は冒頭にオックスフォードの解剖の教授であったウィリアム・ベッティの偉大なる業績を称えている（「政治算術」で有名）。そのほか、経済学者であるビーバリッジ及びケインズらをも社会の医師としての役割の重大さを強調している。そのような立場で彼が、社会の医師となろうとするものの必読の書として準古典と言うべき以下の8冊を挙げている...

- \* 医学小史（チャールズ・シンガー）
  - \* 小児期疾患講義集  
（サー・ロベルト・ハチソン）
  - \* 小児の腹痛（ジョーン・アブリー）
  - \* 村医の疫学（ウィリアム・ピクルズ）
  - \* 感染症の自然史（サー・マクファレン・パーネット&ダビッド・ホワイト）
  - \* 疾病の自然史（ジョーン・ライル）
  - \* 意識（センス）を語る  
（リチャード・アッシャー）
  - \* 連合王国における死因別死亡率のアトラス（G.メルブリン・ハウ）  
注...原著名は後記
- なお、その選択の基準として「これは限られた分野すなわち各著者が個

人的に体験したもの」を採り、他人の華を編集したものは全くないと付言しているのは注目すべき見識である。偉大なる業績を挙げた医界の先人がこのような率直な提案をされたことは、まことに有り難いことである。

- A Natural History of Everyday Life. Lord Taylor of Harlow 著, Cambridge Univ. Press.1988.p.214
- \* A Short History of Medicine by Charles Singer
- \* Lectures on Diseases of Childhood by Sir Robert Hutchison
- \* The Child with Abdominal Pains by John Apley
- \* Epidemiology in Country Practice by William Pickles
- \* The Natural History of Infectious Disease by Sir Macfarlane Burnet and David White
- \* The Natural History of Disease by John Ryle
- \* Talking Sense by Richard Asher
- \* Atlas of Disease Mortality in the United Kingdom by G Melvyn Howe

ここで些か僭越と思いながらも、私は公衆衛生の学徒のひとりとして、後輩にすすめたい良書を選んでみた。その基準としては、明治33年（1900）以降に刊行された内外の関係書に限定し、かつロード・テラーの方針に倣い、比較的狭い分野で著者みずからが体験し、研鑽した下記の業績をとった。

記

- \* 日本疾病史 富士川 游著 松田道雄 解説 東洋文庫 133 平凡社 昭和44
- \* 日本医学史綱要2 富士川 游著 小川鼎三 校注 東洋文庫 262 平凡社 昭和49
- \* 松本順・長与専斎自伝 小川鼎三 酒井シヅ校注 東洋文庫 386 平凡社 1980
- \* 論文を書く人のために 医学を中心として 緒方富雄著 南江堂 昭和33
- \* ウイルスと人間 甲野禮作著 玉川選書 142 玉川大学出版部 1981
- \* 平静の心 オスラー博士講演集 日野原重明・仁木久恵訳 医学書院 1983
- \* ザ・サイレント・ラングウィジ E・T・ホール アンカー版 1973
- \* 村医の疫学（W・N・ピクルズ）辻 達彦訳 1994 私家版
- \* 懐旧九十年 石黒忠恵著 岩波文庫 33 - 161 - 1 1983

以上のなかに、甚だ面映い気持ちではあるが小生の訳したピクルズのもの敢えて加えさせて頂いた。もともと選択は個人の好みであるから、批判の対象になることはやむを得ないと思う。私の切望は心ある先輩、同僚の方々が、各自の推薦書をリストアップして頂きたいと言う事である。そうすれば、かなりコンセンサスに達するものが浮かび上がるものと信じている。

### 辻達彦先生のプロフィール

家族：妻と偕老、三男は医師（北大）別居。

趣味：若いときは山登り、70歳以降は俳句、文筆など。

好きなスポーツはサッカー。念願としては一度PKを試みたい。

好きな作家：鷗外、露伴、荷風、吉村 昭など。

座右の銘：たとえば、本来無一物など。

現在の心境：衰老期のプライマリケアをテーマとして、勉強中。信念としては、権威と責任は表裏一体、責任をとらざるものの権威を認めず。

# 私と疫学

弁護士  
崔 信義



この度、日本疫学会に入会させていただきました。私は弁護士ですが、現在では法廷の場においても疫学の知識が不可欠です。特に今後の研究対象は、因果関係を科学的に分析する手法をどのように法廷に取り入れるかという点が重要です。法廷では、統計的有意差、バイアス、交絡等々の疫学における要因の立証を誰がどの程度負担するかという立証責任が問題となります。疫学においては基本的な問題ですが、これをどのように法的分野に取り入れていくか今後の研究課題です。

## 弁護士という仕事

私は、2006年8月に入会させていただきました。仕事は、仙台において弁護士をやっております。私が、何故に畑違いのようにも見える疫学を勉強することになったのか、日本疫学会に加入するに至ったかについて簡単にお話したいと思います。

私は弁護士として、いわゆる一般民事、刑事事件を毎日の業務としてはこなしているわけですが、医療に関わる事件も引き請ける場合があります。私の場合には、直接に疫学のことを意識し出したのは、原爆症の認定に関わる裁判をするようになってからでした。

## 原爆症認定裁判

この裁判では、年齢が70歳近い被爆者お二人の方が原告です。簡単に説明すると、原爆による被爆者のために「原子爆弾被爆者に対する援護に関する法律」が制定されているのですが、この法律によって、「厚生労働大臣は、原子爆弾の傷害作用に起因して負傷し、又は疾病にかかり、現に医療を要

する状態にある被爆者に対し、必要な医療の給付を行う。」(同法10条1項) ことになっていますが、給付を受けようとすると厚生労働大臣の認定を受けなければなりません(同法11条1項)。上記の男性は、腎臓腫瘍と膀胱腫瘍で手術を受け、女性の方は胃癌手術を受けていて、後遺症等に悩んでいました。お二人は、厚生労働大臣に対してそれぞれ認定申請をしたのですが却下されたので、その却下処分を取り消すように裁判を申し立てたのです。

認定判断の基本的な考え方は、「原因確率(疾病等の発生が、原爆放射線の影響を受けている蓋然性があると考えられる確率をいう。)及び閾値(一定の被曝線量以上の放射線を曝露しなければ、疾病等が発生しない値をいう。)を目安として、当該申請に係る疾病等の原爆放射線起因に係る「高度の蓋然性」の有無を判断する。」というものです。原因確率とか閾値という言葉は、裁判の代理人を引き受けた当時は、初めて聞く言葉だったので非常に戸惑いました。そこで素人ながら調べていくと、原因確率とか閾値とかいう言葉は、どうやら「疫学」という学問分野で使用するらしいというところまでは知ることができたのです。そこで、インターネットで検索している内に、地元の東北大学法学部において坪野吉孝先生(入会にあたって先生から推薦を頂きました。)が健康政策学という授業を持っていることを知り、その授業に出るようになって疫学との交流が始まったのでした。

## 東北大学での疫学との出会い

先生の法学部での授業では、因果関

係の評価、研究デザイン、システムレビュー、がん対策、健康水準と健康指標等々、内容が多岐にわたるものであり、目からうろこが落ちる思いで聴きました。また、授業以外では、先生は他の研究者を対象として「医学がわかる疫学」(熊倉伸宏/高柳満喜子監訳)を読み込むゼミをしていたので、参加させてもらいました。

訴訟においては、公害問題、環境問題、医療過誤問題等々、因果関係が問われる場合が非常に多いのです。ですから、私が疫学の分野において興味を持つのは、裁判という特殊性から、主として因果関係の評価をどのようにするかという議論のところになります。

日本の法律家のほとんどは、現在までのところ、因果関係を科学的に分析するという手法に慣れているとは思われません。『非因果的な競合的解釈の否定を通じた因果性のネガティブな承認』という推論の形式が今日の疫学において標準的な因果推論の方法」(坪野吉孝著「健康政策学講義資料」p40)であるとされているのですが、統計的有意性、バイアス、交絡等の基本的な概念をどのように法廷における証明手続において評価導入するかという点が目下の私の研究対象となっています。法的な証明手続と疫学における因果推論の方法論の合体というところでしょうか。このような問題意識から、今回、日本疫学会に入会させていただきました。

## 子供の言語教育

私の家庭における目下の関心は、子供の使用する言語についてです。私の家庭では韓国語が公用語なので子供も家庭では韓国語、幼稚園では日本語と

いうふうに使っているのですが、英語も話せるようにするためにはどうすればよいのかが現在の興味の的です。妻は、脳研究の研究室に籍を置いている関係上、子供の言語教育に関心が深いのですが、今後は、学会における脳

研究の成果を生かした言語教育をどのように実践するかが当面の課題です。

そこで、複数の言語教育に関する疫学的報告がないか現在探索中の毎日です。

### 崔信義先生のプロフィール

日本での弁護士資格取得後、両親の母国である韓国に留学。ソウル国立大学で3年間を過ごし、同時期にソウルの渉外事務所勤務。その後、大阪での勤務を経て、仙台で開業。仙台では東北大学において医療法を研究し、2004年9月Ph.D.取得。韓国で結婚。家庭内では韓国語が公用語。

家族：妻、息子（4歳）

趣味：妻は温泉が大好きなので、家族で温泉めぐりをしています。

家庭での関心事：子供に英語を教えること。韓国語と日本語は構造が類似しているため習得が比較的楽なのですが、構造が全く異なる英語を子供はどのように習得するか、その観察が現在の楽しみです。

# 私と疫学

## ～疫学を地域の方の健康に結び付けたい～

産業医科大学医学部公衆衛生学教室  
山本 美江子

### 1. 疫学との出会い

公衆衛生学をやっているながら日本疫学会に入会していなかったことが非常に恥ずかしく、新会員のニュースレターへの投稿を要請された際にはお引き受けすることを非常に迷いました。しかし、これも学会との良いご縁を頂いたと思ひまして僣越ながら書かせて頂きます。

私と疫学との出会いは、学生時代の吉村健清先生（福岡県保健環境研究所長）との出会いとなります。当時、吉村先生は産業医大の教授をされており、非常に学生を大切に下さり、お忙しいにもかかわらず何時間もディスカッションをして下さったのを鮮明に覚えています。健康を集団としてみる視点や国際保健について熱く語られる吉村先生の世界には強く惹かれ、その後の私の医師としての人生に非常に影響を与えています。それは、疫学と

いう武器を持って大勢の人々の健康を手に入れるというイメージでした。私は今、地域高齢者の介護予防に取り組んでいますが、高齢者の中で流行の自分史を私が書くとすれば、大学時代の欄に必ず『吉村先生と出会い、疫学を知る。』と記載すると思います。

今年度、学会に入会したのは、疫学の重要性を今更ながら自覚したためなのですが、疫学を地域の方の健康づくりに役立てたいと強く思ったからでもあります。後に私の自分史の中に「日本疫学会入会」と記入することになるような活動を目指したいと思います。

### 2. 今、取り組んでいること

今年度は、地域の元気高齢者の方を対象にした介護予防に福岡県中間市にて取り組ませて頂きました。地域に根ざした介護予防活動の重要性を再確認させて頂きました。その際、大変お世話になった中間市老人クラブ連合会保



健部長の東悦子さんからは「先生、老人クラブの会員をみていると、長生きするのに、金持ちかどうか、社長だったとかは、どうも関係ないようだ。長生きの要因はなんだろう。私は以前からずっと考えている。」という意見と質問を頂きました。何気なくおっしゃっていたのですが疫学の視点を地域住民の方が持っている私としては驚いたことでした。研究して地域住民の方に結果に基づく健康づくりができないかと同時に思った瞬間でした。

また、私は中間市に隣接する水巻町で寝たきり予防のために運動を定期的に行っている高齢者の自主グループの方々と交流させて頂いていますが、そのグループは保健師さんなどにアドバイスされたわけでもなく、何か成果

を出さないと意味がないと6ヶ月に1回継続的に体力測定を行い、そのデータを4年、5年と蓄積されていました。そのデータははっきりと年齢が上がっても体力増進または維持をしている成果を示していました。このグループの方達は決して保健医療関係の退職者の方ではないのですが、疫学的な視点を持って運動を実践されていました。成果を示して根拠を作って町を動かしたいと思ったただだと、その自主グルー

プの方々はおっしゃるのですが、自分の足りない視点を指摘されたような気分がしたのを覚えています。私は、これらのことより保健医療の専門職はもっと地域の方の健康につながるよう専門職らしく疫学を实践すべきではないかと痛感させられました。健康づくりの根拠を現場で作っていくことの重要性も感じます。

私は今研究職と言う立場ですが、疫学をもっともっと地域の人々の健康や

よりよい生活に結び付けることができたらと強く思います。そして、そのことが、健康で元気な、障害者や高齢者でもいきいきと暮らしていける地域づくりにつながっていくようにと強く願っています。そのために、日本疫学会にて勉強させて頂きたいと思っております。

会員の皆様、どうぞご指導の程をお願い申し上げます。

### 山本美江子先生のプロフィール

- ・地域に根ざした、地域の方の健康といきいきとした生活につながる公衆衛生活動と研究を目指したいと思っています。
- ・個人的な私の小さな夢は、障害者の方や高齢者の方がいきいきと働く地域に根ざしたおしゃれでおいしいパン屋とカフェを開くことです。

趣味：旅行（温泉めぐり、窯元めぐり、ドライブ）、食べ歩き、料理、果物狩り  
 昨年は脳トレにはまり、地域の高齢者の方に広めてみました。

### 研究班紹介

## AGESプロジェクトと「健康の不平等」研究会

日本福祉大学社会福祉学部  
 近藤 克則

AGESとは、Aichi Gerontological Evaluation Study（愛知老年学的評価研究）プロジェクトの略称である。高齢者ケア政策の基礎となる科学的知見を得る目的で、厚生科学研究費補助金を受けて愛知県の2自治体を対象に1999年度に始まった。

対象：①要介護者（要介護認定を受けている者を担当しているケアマネジャーが回答）、②その家族介護者、そして③（要介護認定を受けていない）一般高齢者の3つのデータベースからなっている。一般高齢者データは、すでに1999年度は2自治体、2003年度に3県の15自治体、2004年度に2県の3自治体のデータがあり、2006年度に3県10自治体のデータが増える見込みである。

研究組織：公衆衛生学、保健社会学、栄養学、家族社会学、心理学、社会福祉学、作業療法学、経済学、地域計画学、地理学など、多くの分野の研究者が、それぞれの分野の研究の到達点や

方法論を持ち寄り、調査票を設計し分析にあたっている。

「健康の不平等」研究会は、AGESプロジェクトの一般高齢者データを主に用いて、社会疫学の視点から研究をしている。2003年度のデータ（n=32,891人）を用いた分析結果を、「検証『健康格差社会』-介護予防に向けた社会疫学的大規模調査」として、3月に出版予定である。2007年3月18日には、出版記念の国際シンポジウム「検証『健



康格差社会』 - 介護予防に向けた社会疫学の可能性」を、Ichiro Kawachi教授（参加申し込みは、日本福祉大学COEプログラムのホームページから）を本プロジェクトは、2002年度から学術フロンティア推進事業（文部科学省）、2003年度から日本福祉大学21世紀COEプログラム「福祉社会開発の政策科学形成へのアジア拠点」の一端に位置づけられている。

## 功労賞および奨励賞の贈呈

先日の日本疫学会学術総会において、下記の通り、平成18年度日本疫学会功労賞および奨励賞の贈呈が行われました（敬称略）。奨励賞を受賞された大久保先生と八谷先生に受賞の喜び、今後の抱負について述べていただきました。

功労賞：徳留 信寛（第16回日本疫学会学術総会学術会長、名古屋市立大学大学院）

奨励賞：大久保 孝義「血圧変動から疫学・臨床・薬学の接点を求めて」

八谷 寛「肥満の病態解明を目指す疫学研究」

## 日本疫学会奨励賞を受賞して

### 血圧変動から疫学・臨床・薬学の接点を求めて

東北大学大学院薬学研究科医薬開発構想寄附講座 大久保 孝義

このたび、日本疫学会奨励賞という名誉ある賞をいただくことになりました。吉村健清理事長、児玉和紀学会長はじめ関係の諸先生方に感謝申し上げますと共に、これまで、ご指導・ご支援を賜った多くの先生方、諸機関、協力者の方々にこの場をお借りして心より御礼申し上げます。

東北大学卒業後、山形県立中央病院で救急当直に明け暮れる研修医生活を送っていた折に、オーベンの後藤敏和先生（現同救命救急センター副所長、「降圧薬の使い方」〔金芳堂〕著者）より、血圧変動を加味した高血圧臨床の奥深さを伝授いただき、より深く勉強させていただきたく当時気鋭の高血圧研究者であった今井潤先生（現東北大学臨床薬学教授）のもとを訪ねました。その当時、今回受賞対象となった、24時間血圧および家庭血圧に基づくコホート研究である「大迫（おおはさま）研究」のデータが集積されつつあり、疫学的分析の実施およびそのための人が必要、ということで今井先生から久道茂先生（現東北大学名誉教授）をご紹介いただき、東北大学公衆衛生学教

室の大学院生として大迫研究をテーマに勉強させていただくことになりました。辻一郎先生（現東北大学公衆衛生学教授）のご指導の下、幸運にも諸先輩方が蓄積された膨大なデータをもとに多くの分析を進めることができ、また生活習慣病全般、および他の様々な領域における、様々な種類の疫学研究・調査方法について、その道の専門

家の先生方から直接、実際に、また幅広く学ぶことができました。今思えば実に恵まれた環境でした。博士課程修了後、George Institute for International Health（Sydney, Australia）において循環器疾患の大規模臨床試験・メタアナリシスについて勉強させていただきました。特に、尾前照雄先生（国立循環器病センター名誉総長）のご高配をいただき、降圧療法の脳卒中再発予防効果を初めて明らかにした臨床試験PROGRESSの分析に携わることができたのは得がたい経験でした。また、アジア・オセアニア地区の循環器コホートのメタアナリシスAPCSCや、降圧薬臨床試験のメタアナリシスBPLTTCについても多くを学ぶことができ、帰国後も研究に関わらせていただいております。また短い間でしたが東北大学国際保健学分野では上原鳴夫教授のご指導の下、医療の質に関わる分野を中心に国際保健学の一端を垣間見、また東北大学のINCLIN



右から功労賞を受賞された徳留信寛先生、奨励賞を受賞された八谷寛先生と大久保孝義先生



(International Clinical Epidemiology Network) Clinical Epidemiology Unit 参加に微力を尽くすことができました。その後今井教授のご高配により薬学研究科に異動後は、今井教授が拠点リーダーを務める21世紀COEプログラム「医薬開発統括学術分野創生・人材育

成拠点 (CRESCENDO)」のメンバーとして、主に薬学領域における疫学研究・教育に携わっております。

上記を通じて一貫して大迫研究を研究の中心においておりますが、教育等を通じ様々な場面で医療従事者における疫学的重要性を実感させられており

ます。研究面で血圧表現型の「究極体」とそれを現場に生かす道を追求するとともに、多くの新たな関わりを通じて疫学・臨床・薬学の接点の中から直接的に人のためになる研究・教育を行っていただければ、と考えております。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

## 日本疫学会奨励賞を受賞して

### 肥満の病態解明を目指す疫学研究

名古屋大学大学院医学系研究科公衆衛生学教室 八谷 寛

この度、栄えある日本疫学会奨励賞を受賞いたしました。大変光栄に感じております。吉村健清理事長はじめご関連の先生方に心より感謝申し上げます。

私の所属する名古屋大学大学院医学系研究科公衆衛生学教室では、1997年より愛知県内某職域をフィールドとした生活習慣病発症要因探索のためのコホート研究を実施してきております。私は、大学院入学当初から同コホートの実務に携わる傍ら、そのベースラインデータを用いた動脈硬化性疾患危険因子に関連する要因の探索的分析を実施し、肥満さらに成人期における体重の増加が病態の形成に重要であること

を確認しました。そしてそれら危険因子が集積する、いわゆるメタボリックシンドロームに対する肥満や体重変動の関与についての分析を経て、リスクファクター集積の上流にあるインスリン抵抗性、アディポサイトカイン異常といった病態の疫学的な解明を目指して参りました。同時に、複数にわたる健診施設の検査方法や精度保証の差異の研究結果への影響に関する検討、食生活などの調査指標の再現性・妥当性の検証、自記式アンケートを用いた標的臓器疾患発症登録システムの確立、研究フィールドに対する情報還元・研究参加率の増加の工夫などに努めてきております。

本研究課題に対する今回の受賞を糧に、さらに努力を続けたいと思うとともに、研究をご指導頂いた豊嶋英明教授、玉腰浩司助教授、そして公衆衛生学教室でともに研究する大学院生、スタッフの皆さんにこの場を借りてお礼申し上げます。

また私は、1999年から文部科学省研究費によるがんコホート研究 (JACC study) に参加する機会を得、主として胃がんの発症・死亡要因に関する分析を通して大変多くのことを勉強させて頂きました。現在は、日本動脈硬化予防研究基金による統合研究 (JALS) にも参加させて頂いております。今後も、生活習慣病の病態理解に貢献する疫学研究の実施に努力を惜しまない所存でありますので、疫学会の先生方には変わらぬご指導、ご鞭撻を頂きますようお願いいたします。

## 学会報告

### 第17回日本疫学会学術総会を終えて

事務局長 (放射線影響研究所疫学部) 西 信雄

1月26日 (金)、27日 (土) の2日間、第17回日本疫学会学術総会が広島市南区民文化センター (広島県立広島産業会館) において開催されました。いろいろと行き届かない点があったかと思いますが、皆様のご協力を持ちまして無事終了することができました。

今回は演題数229題、参加者数475名を数え、過去最大規模の学術総会となりました。もう一つ特筆すべき数は、放射線影響研究所からのスタッフの数

でした。疫学セミナーや市民公開シンポジウムなどの関連行事が開催された25日 (木) も含めると、延べ60名のスタッフが手伝ってくれました。そろいの水色のジャンパーを着て、総合受付、クローク、発表者受付などに並んでいる様子は、参加された先生方の目を引くものでした。

また今回はじめての試みとして託児所を設けました。専門の保育士さんをお願いしたとはいえ、不安を抱えなが

ら当日を迎えました。結局10名弱の先生方にご利用いただき、おおむね肯定的な評価をいただきました。2日目の朝に、すでに顔なじみになったスタッフのところに、お子様が駆け寄って行くのを見た時は、本当に託児所を設けて良かったと思いました。

学術総会中は私も水色のジャンパーを着て、トランシーバーを付けて走り回っておりましたので、皆様とは十分にお話しもできず失礼いたしました。あらためて、今回ご参加いただいた先生方に感謝申し上げます。

## 第12回若手の集いについて

京都大学医学研究科健康情報学 講師 宮木 幸一



冒頭の挨拶をする寶珠山先生

去る2007年1月25日、第17回学術総会事務局のご好意で会場をご用意いただき（放影研疫学部の先生方、特に坂田律先生に深謝いたします）、広島市南区民文化センター3階大会議室において第12回疫学の未来を語る若手の集いが開催されました。前半90分は宮木から「疫学研究へのゲノム情報の応用とゲノム研究への疫学者としての貢献のあり方」というテーマで話題提供と議論を行い、後半30分は産業医科大学の寶珠山先生から「米国スーパーコースを和訳してみませんか」というテーマでピッツバーグ大学の優れたオンライン講義システム（世界中の教育者を対象とした「公衆衛生・予防医学の講義」の情報の宝庫で、151カ国、38,000名以上をネットワークで結び、3,000を超える講義を提供）について話題提供が行われました。

議論の流れを紹介すると、米国CDCではゲノム情報に対する疫学的アプローチの重要性を指摘しており、世界各国のゲノム疫学研究者の協力と情報交換を目的にHuGENetと呼ばれる組織を立ち上げ、ヒトゲノムに関する疫学情報をHuGE Reviewという形式でシ

ステマティックにレビューしていく作業を開始していること、またゲノム疫学研究の報告の質を高めるべく、STREGA（STrengthening the REporting of Genetic Associations）statementと呼ばれる声明がもうすぐ公表されようとしていること、ゲノム疫学研究の質を疫学的な観点で高めることに必要性を感じている研究者が増えてきていることなどを話題提供しながら、以下のような問題提起・議論がなされました。

- ・ゲノム研究で遺伝素因だけを見ているだけでは不十分で、生活習慣を含

む環境要因を合わせた評価が不可欠  
従来のゲノム研究者だけでは十分な研究が難しいので疫学者の貢献が大切になり得る。

- ・公衆衛生がゲノム科学を必要としている度合いよりも、ゲノム科学が公衆衛生（特に疫学）を必要としている度合いが強い 相互理解と協力関係構築が大切であるはずであるが、疫学者とゲノム研究者の間に横たわる溝は浅くはなく課題は多い。
- ・疫学が基礎医学研究に必須の学問として再評価されていく可能性があり、またそうあるべきである ゲノム情報を用いない疫学研究にしっかりと取り組んでいくことを基本に、若手疫学者としてゲノム情報の応用可能性を考えていく。

おかげさまで50名程度の若手研究者の参加があり、午後6時からの2時間では議論が尽きず、30名ほどが居酒屋に場所を移して自由に意見交換することができ、有意義な会となりました。所属の異なる若い研究者が、未熟ながらも自由闊達に意見を述べ合うこのような会があることは日本疫学会の良き伝統の一つであり、世話人の諸先輩方にご指導を仰ぎながら若手の会が継続できるよう努力していきたいと思っております。今後ともご指導の程よろしくお願いいたします。



話題提供する筆者

## 学会案内

### 国際疫学会西太平洋地域学術大会2007

2007 Joint Scientific Meetings of the Australasian  
Epidemiological Association (AEA) and the International  
Epidemiological Association (IEA) Western Pacific Region.  
場 所: Hobart, Tasmania, Australia  
日 時: 2007年8月27-29日  
詳 細: <http://www.cdesign.com.au/aea2007/>



### 第18回日本疫学会学術総会の予定

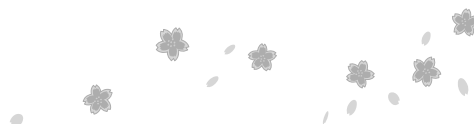
日 程: 平成20年1月25日(金) ~26日(土)	テ ー マ(仮): 地球時代の疫学に向かって 感染症疫学や遺伝疫学な ど, 古い疫学と新しい疫学 の双方から, 21世紀の疫学	に課せられた新たな取り組 みを展望していきたい。 事務局: 順天堂大学医学部公衆衛生学 教室(学会長 丸井英二)
会 場: 学術総合センター (東京, 神保町・竹橋)		

### 第39回アジア太平洋地区公衆衛生学術連合 (APACPH) 国際会議のご案内 The 39th Conference of Asia-Pacific Academic Consortium for Public Health

期 日: 2007年11月21 - 25日	Public Health (生活習慣病の予防~ 栄養と公衆衛生の挑戦~)	学長などが予定されています。 詳細は会議ウェブサイト ( <a href="http://www.apacph2007.org/">http://www.apacph2007.org/</a> ) 及び女子栄養 大学ホームページ内の案内 ( <a href="http://www.eiyo.ac.jp/apacph">http://www.eiyo.ac.jp/apacph</a> ) をご覧下さい。
場 所: 女子栄養大学 坂戸キャンパ ス(埼玉県坂戸市, 東武東上 線若葉駅)	基調講演として, WHOの栄養担当 専門官である西田千鶴氏, 前APACPH 会長でもある国立保健医療科学院の林 謙治次長, 本大会の国内組織委員会委 員長である女子栄養大学の香川靖雄副	
メ ー ン テ ー マ : Lifestyle-related Disease Prevention: The Challenge for Nutrition and		

### 地域がん登録全国協議会第16回総会研究会のご案内

日 時: 2007年9月7日(金) (実務者研修会は9月6日)	会 長: 財団法人放射線影響研究所 主席研究員・疫学部長 児玉和紀	プログラム: 未定(市民公開講座を開 催予定)
場 所: 広島市南区市民文化センター (第17回日本疫学会学術総会 と同会場)	テ ー マ: 保健・医療と疫学研究におけ る地域がん登録の役割	紹 介 H P : <a href="http://www.cancerinfo.jp/jacr/soukai.html">http://www.cancerinfo.jp/jacr/soukai.html</a>



## 日本疫学会新役員決まる

任期満了に伴う理事選挙等により、以下のように新役員が決まりました。(順不同、敬称略、任期：2007年1月総会-2010年1月総会)

### 【理事長】

児玉和紀

(財団法人放射線影響研究所)

### 【理事】

辻 一郎(東北大学大学院)

深尾 彰(山形大学大学院)

中村好一(自治医科大学)

山縣然太郎(山梨大学大学院)

三浦宜彦(埼玉県立大学)

山口直人(東京女子医科大学)

大井田隆(日本大学)

津金昌一郎(国立がんセンター)

徳留信寛(名古屋市立大学大学院)

浜島信之(名古屋大学大学院)

佐藤眞一(大阪府立健康科学センター)

中山健夫(京都大学大学院)

秋葉澄伯(鹿児島大学大学院)

田中恵太郎(佐賀大学)

### 【指名理事】

岸 玲子(北海道大学)

祖父江友孝(国立がんセンター)

岡山 明(国立循環器病センター)

橋本修二(藤田保健衛生大学)

斎藤重幸(札幌医科大学)

### 【監事】

玉腰暁子(国立長寿医療センター)

黒沢洋一(鳥取大学)

なお、理事会における具体的な役員体制は以下の通りです。

理事長代行理事：徳留信寛，財務

担当理事：中山健夫，庶務担当理事：中村好一，名誉会員推薦担当理事・功労賞受賞者推薦担当理事の長：佐藤眞一，奨励賞選考委員長：深尾彰，国際交流委員長：中村好一，ニュースレター担当理事：三浦宜彦

JE編集委員会委員長：中村好一(2005年1月～2007年12月)，倫理問題検討委員会委員長：山縣然太郎(2006年9月～)，倫理審査委員会委員長(東日本)：山口直人(2006年1月～2009年1月)，同(西日本)：竹下達也(同任期)



## 事務局だより

### (1) 事務局の移転

2007年度から、事務局が福岡県保健環境研究所から(財)放射線影響研究所に移転しました。

ご意見、お問い合わせ、入会手続き依頼等のご連絡は、下記新事務局までお願いいたします。

### 【日本疫学会(新)事務局】

(財)放射線影響研究所 疫学部  
気付

〒732-0815

広島市南区比治山公園5-2

TEL：082-568-8531

FAX：082-568-8532

E-mail：jea@rerf.or.jp

郵便振替口座記号番号：

01340-7-61254

「日本疫学会」

事務局長：西 信雄

### (2) 2007年度会費の請求について

3月上旬に払込取扱票を同封した2007年度会費請求についてのご案内を郵送いたしました。お手元に届きましたら、速やかに会費の納入をお願いいたします。

### (3) 日本疫学会会員数

日本疫学会会員数(2006年12月31日現在)は1,420名です。

会員の内訳は、名誉会員25名、普通会员1,395名(内 評議員219名)です。

### (4) お礼

吉村前理事長が産業医科大学教授から福岡県保健環境研究所所長に就任されたことに伴い、2004年4月から急遽事務局を引き受けることになりました。お引き受けしたものの分からないことが多かったのですが、理事長をはじめ

理事の方々、また、多くの会員の皆様に支えられてこれまでやってこられたと思っています。お礼申し上げます。

次期事務局につきましても、引き続きご支援賜りますようお願い申し上げます。ありがとうございました(片岡恭一郎，尾辻美穂，山城好恵)。

